

昭和五十六年度 特別研究員研究発表要旨

よきひとのおおせ

如来よりたまわりたる信心

飯 山 等

よきひとのおおせ

『歎異抄』後序に記される「故聖人の御ものがたり」は、親鸞にとってどういう意味をもつてでことであつたのであろうか。信心一異の相論と呼ばれるのできことは、他に『御伝抄』『浄土法門見聞抄』『高田正統伝』等にも記されている。しかし、『歎異抄』とこれら三著とは、その叙述に一点大きな相違が見られる。それを瑣末な違いと見なすとき、われわれはこのできことが親鸞に与えた決定的に重要な意味を見失うことになる。その意味とは、「源空が信心も、如来よりたまわりたる信心なり。善信房の信心も如来よりたまわらせたまひたる信心なり。されば、ただひとつなり。別の信心にておわしまさんひとは、源空がまいらんずる浄土へは、よもまいらせたまひそうらわじ」というおおせとの出会い、端的には「如来よりたまわりたる信心」という教言との出会いにあったと私は考える。親鸞にとって「善信が信心も、聖人が御信心もひとつなり」という自身の領解が師によって証誠されたということとは大きな喜びであつたに違いない。しかし、それにもまして親鸞にとってこのおおせは、決して「勢観房念仏房なんどもうす御同朋達」に向けられたものでなく、ほかならぬ親鸞自身

に、自己の信を厳しく問わしめることとなつたのではなからうか。では何が親鸞をしてこのできごとに出遇わしめたのか。なぜ親鸞のみがこのことばに値遇しえたのか。善信という名告りはそれを端的にわれわれに語っているように思う。

善信の名告り

建仁辛酉曆二十九歳のとき、吉水の源空の門に帰す。そのとき、いかなる問いが親鸞をして源空のもとへ歩ましめ、どのような師教に値遇せしめることとなつたのか。『惠信尼消息』は伝える、「ただ、後世の事は、善き人にも悪しきにも、同じように、生死出ずべき道をば、ただ一筋に仰せられ候いしをうけ給わりさだめて候いし」と。いかなる問いか、「ただ後世の事」である。それ以外の何事でもない。いかなる教えに出遇つたのか、「善き人にも悪しきにも同じように生死出ずべき道」に。いかなる師に出遇つたのか、「善き人にも悪しきにも同じようにただ一筋に仰せられ候いし」ひとつに。——それはまさに大乘との値遇であつた。——比叡山においてついに出遇ふことのなかつた事実として大乘との出遇い、それが吉水であつた。それは換言すれば、序分との出遇いである。序分とは端的な事実である。そしてこの序分こそ、正宗分を誇つた叡山が決定的に喪失していたものであつた。序分との出遇い、それはさらに言えば、「如是」なる経験である。親鸞はこのとき始めて「如是」と称した。始めに「如是我聞」あり。それは經典の劈頭におかれた序詞ではなかつた。ここに、「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらずべしと、よきひとのおおせをこうむりて、信ずるほかに別の子細なき」ひとは生れた。それはまさに善信の誕生であつた。

しかし、その名は、それから数年ののち元久乙丑歳親鸞三十三

歳、『選択集』の書写と真影の図画が許されることをもって名告られる。七十三歳の師源空から師出世本懐の書である『選択集』を付嘱される、それは親鸞にとつて大きな喜びであると同時に、そこに思われたことは『大無量壽經』を付嘱され流通すべきことを託された弥勒のことであつたのではなからうか。ここに惟う、善信の名告り、それは、決して私的な名告りではないことを。それは善く信ズベシとの仏言に對して挙体的になされる善く信ゼンとの応答の名告りにほかならない。このように「仏道人身難得今已得淨土難聞今已聞信心難発今已発」なる身の名告り、「同じように生死出ずべき道」を奉行し服膺する如是なる身そのものの名告りが、善信にほかならない。

親鸞の名告り

「如来よりたまわりたる信心」信心という名にわれわれがまといつかせる情緒性主観性をきびしく否定し破っていく〈論〉のことばとしてこのおおせに出遇う。そのことによつて、善信なる信の今が如来よりたまわりたる今なることを自証する知の名告り、それが親鸞にほかならない。それは、総じては「敬信真宗教行証特知如来恩徳深」の名であり、別しては「広蒙三經光沢特開一心華文且至疑問遂出明証」の名告りである。

自身の姓を書名とし、自身の鈔出ともいえる『愚禿鈔』を総結するといわれている最後の一段が、この源空のおおせと深く呼応しているという事実、このおおせとの値遇がもつた意味の大きさを知ることができる。われわれはその視野を『愚禿鈔』全体に

広げるとき、この書の全篇を貫ぬいている「応知」の言に気づく。「聞賢者信・頭愚禿心」とは、恣意の介在を自身に厳しく拒絶する、おおせに発遣される「応知」の営みにほかならない。『愚禿鈔』はまさに愚禿を歩ましめた鈔なのである。『愚禿鈔』の応知の書ともいふべき性格に注目するとき、そこに印象的に知られてくるのは、『頭淨土真実教行証文類』において、故知・明知・良知・誠知・信知・真知の語をもつてはじめられる諸文が湛える知の感動である。それは、「沈自性唯心貶淨土真証迷定散自心昏金剛真信」なる疑を課題として荷負つた親鸞なる志願の感動にほかならない。

唯円の志願

このような「如来よりたまわりたる信心」というおおせとの出遇いによつて歩まれた親鸞の歩みを貫ぬく志願を、自らの場で荷負つたひとが唯円だった。師親鸞によつて与えられた眼によつて、「さびわいに念仏しながら、直に報土にうまれずして、辺地にやどをとらん」〈疑〉を見定め、自身が身を置く状況を、「みなもつて信心のことなるよりことおこりそうろう」と受けとめることによつて、「一室の行者のなかに、信心ことなることなからん」という悲願に立つ『歎異抄』は生れた。それは、親鸞その人を描くことを目的とはせず、ただ親鸞が生きた善信なる事実、さらに言えば親鸞を親鸞として生かした〈信〉のみを明らかにすることをお願いしているのである。